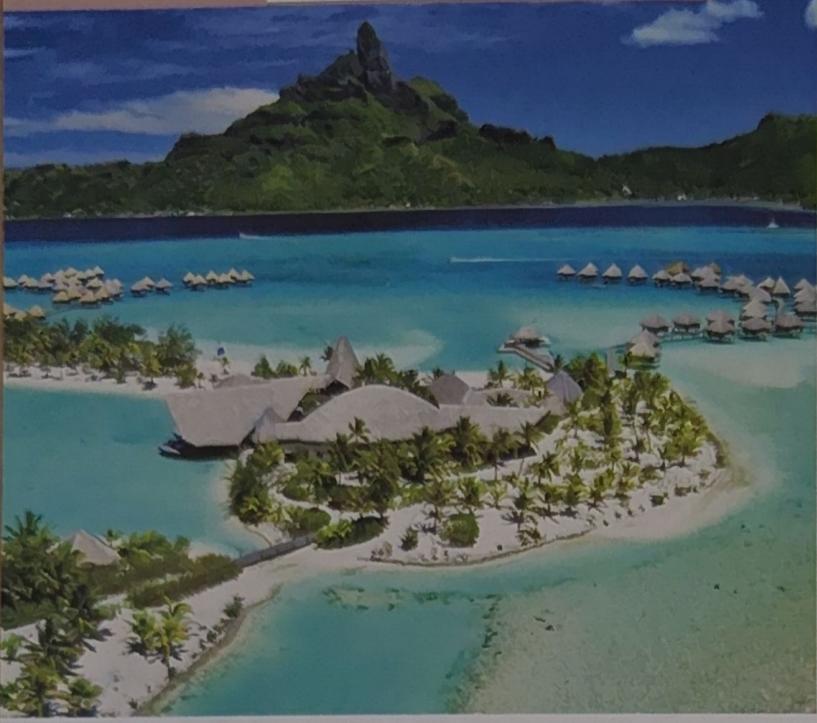


11節 オセアニア



▲① ボラボラ島の水上コテージ(フランス領ポリネシア)

ボラボラ島はサンゴ礁に周囲を取り囲まれた火山島で、タヒチ島とともに世界的な観光地となっている。

►③ オセアニアの自然環境

(Diercke Weltatlas 2008, ほか)



►② オセアニアの範囲 島々が点在する地域は、ミクロネシア、メラネシア、ポリネシアに区分される。



●地域の考察方法● オセアニアは、かつてはイギリスをはじめとしたヨーロッパとの結びつきが強かったが、近年はアジアとの結びつきを強めている。この節では、地域の特徴の一つである「アジアとの結びつき」を、文化や産業、観光などの事象と関連づけて考察していく。

●一つの大陸と太平洋の島々

オセアニアは、オーストラリア大陸やニュージーランド、太平洋

の島々からなる。オーストラリア大陸は、その形成年代がきわめて古く、大陸の西部は安定陸塊(りくかい)
(→ p.35) となっている。大陸東部の山脈はなだらかで、古期造山帶(じょう)
(→ p.34) に属する。大陸北東部の沿岸には、世界最大の

サンゴ礁(じょう)
(→ p.41) であるグレートバリアリーフが広がっている。ニュージーランドは、起伏に富む地形で、南島には標高 3000 m を上まわる山々が連なる。環太平洋造山帶に含まれ、火山や地震が多い。太平洋上の島々の多くは火山島で、美しいサンゴ礁が発達している。

気候についてみると、オーストラリア大陸の北部は熱帯で、サバナ気候の地域が広がる。東部沿岸には、比較的平均気温が高く、雨も多い温暖湿润気候が、南東部やタスマニア島には、西岸海洋性気候がそれぞれ分布する。大陸の南部や南西部には、冬季に雨の多い地中海性気候がみられ、内陸には、砂漠気候などの乾燥した地域が広がる。一方、ニュージーランドでは、偏西風(しつじかん)
(→ p.66) の影響を強く受ける西岸海洋性気候が分布するため、1年を通じて適度な降水に恵まれ、温和である。太平洋の島々の多くは熱帯に属する。

プラス α

オーストラリアの独特的な生態系

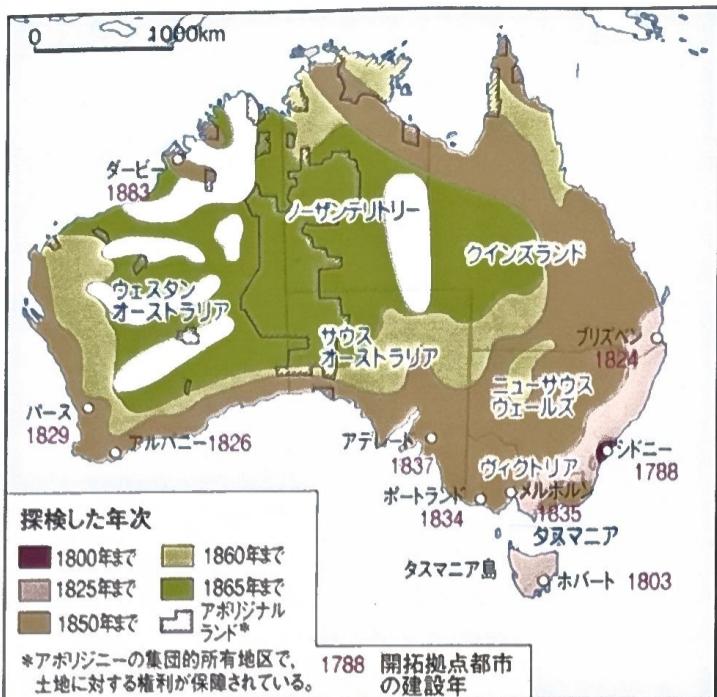
約 2 億年前からほかの大陸と隔離されていたオーストラリア大陸は、ユニークな特徴をもった生物が多いことで知られる。例えば、コアラやカンガルーなどの有袋類はその代表といえる。また、カモノハシのように、ほ乳類の仲間でありながら、卵を生む珍しい生物もみられる。

植物では、ユーカリやアカシアの種類がひじょうに多い。これらの仲間は、湿潤地域から乾燥地域、また海沿いの低地から高山帯にいたるまで、さまざまな環境にうまく適応しながら広い範囲に分布している。

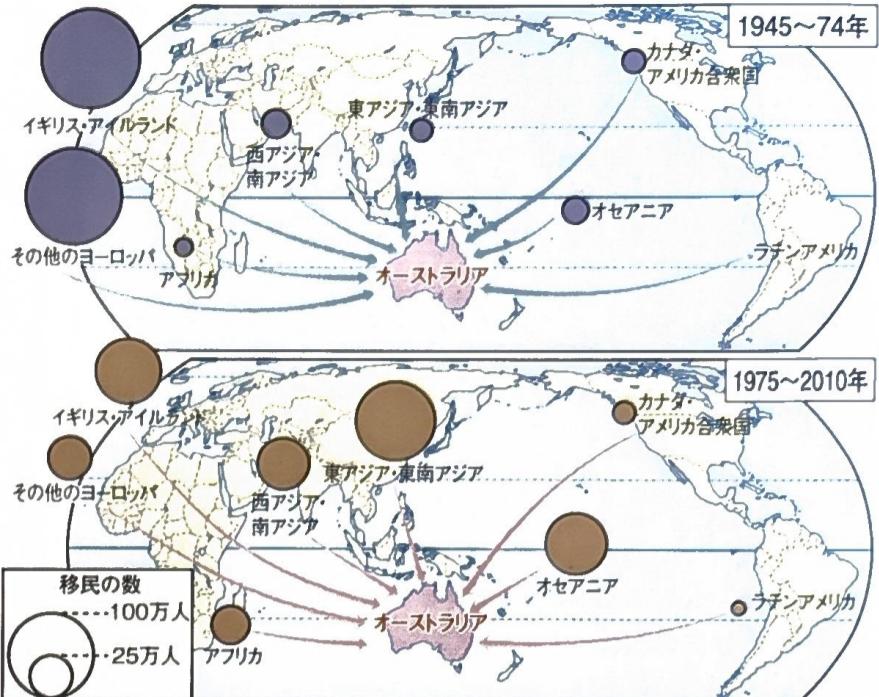
5

10

15



▲④ オーストラリアの開拓(MAN IN AUSTRALIA,ほか)



▲⑤ オーストラリアに移住する人々の出身地の変化(Australian Bureau of Statistics) 読図 時間の経過とともに、移民の出身地にどのような変化がみられるだろうか。

1 オセアニアの移民の歴史と多文化社会

ヨーロッパ人の入植

先住民のアボリジニーやマオリがそれぞれ暮らしていたオーストラリアとニュージーランドの開発は、おもにイギリスの手によって始められた。シドニーやメルボルン、オークランド、クライストチャーチなど、初期に入植の進んだ都市は、現在でもそれぞれ経済や交通の中心地となっている。入植や産業が進展するとともに、不足しがちな労働力を補うため、イギリスやアイルランドをはじめとするヨーロッパ諸国から、積極的に移民を受け入れ続けた。今でも、オーストラリアやニュージーランドの都市には、伝統的な建築物や、アフタヌーンティーでくつろぐ習慣などのなかに、ヨーロッパ風の文化が色濃く残されている。
(→ p.318 ①)

アジア系移民の増加

例えば、オーストラリアにおいて、アジアから移り住む人々の数が急激に増加したのは、1970年代以降のことである。なかでも、ベトナムやカンボジアからは、戦争や内戦によって生じた多数の難民を世界に先がけて受け入れた。ホンコン(香港)からの移民も多かったが、ホンコンの中国への返還が決定されると、1980年代後半から90年代半ばにかけて、オーストラリアに移り住む人々が急増した。しかし、1997年の返還後も中国経済が安定していることがわかると、多くの人々がまた戻っていった。このように、移民の数は、送り出す国や地域の戦乱、経済、政治不安などの事情に大きく左右される。オーストラリアへは、ほかに中国やフィリピン・マレーシアなどから移り住む人も多い。

リード

図⑤のように、オーストラリアではアジアやオセアニア出身の移民が増加してきたことがわかる。なぜそのように変化してきたのか、背景をみていこう。

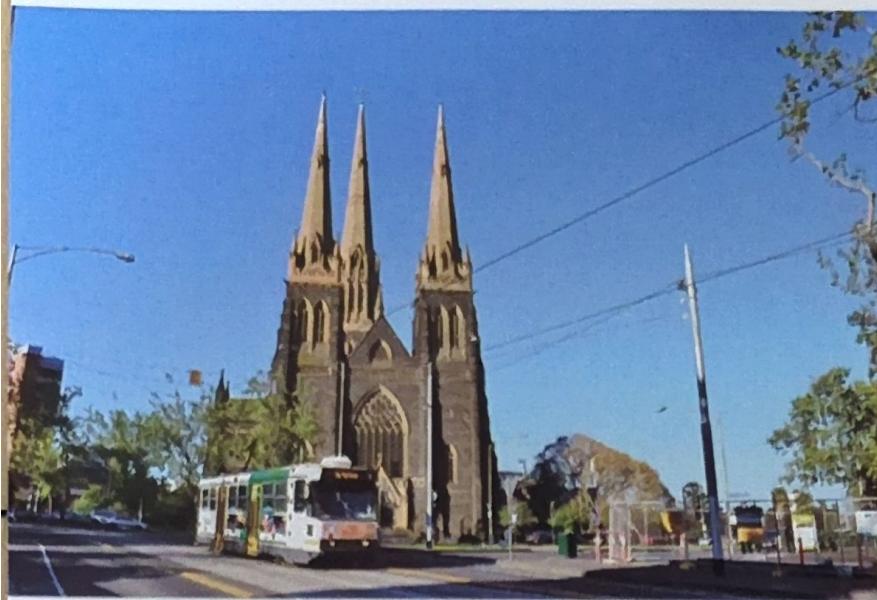
リンク→

共生に向けた取り組み(p.221)

① 午後の時間、家族や友人を交えてジャムやクリームを添えたスコーンなどとともに紅茶を楽しむ習慣。19世紀半ばのイギリスで広まり、当時の植民地にも普及した。専にお茶を楽しむだけでなく、社交や礼儀作法を養う場としても位置づけられていた。

年	事項
B.C.4万年ごろ	アボリジニー渡来
1770	クックが東海岸を探検 ニューサウスウェールズをイギリス領と宣言 イギリス、流刑囚を送る(～1868)
1788	ゴールドラッシュ始まる
1851	オーストラリア連邦成立
1901	移民制限法発布
1945	ヨーロッパからの大量移住始まる
1967	アボリジニー保護の連邦政策始まる
1973	イギリスがECに加盟 非白人への法的差別撤廃
1989	第1回アジア太平洋経済協力会議(APEC)を開催
2000	シドニーオリンピック開催

▲⑥ オーストラリアの歩み



▲① イギリスの影響を受けた街なみ(オーストラリア、メルボルン、2012年撮影)

▲② さまざまな民族が暮らす街(オーストラリア、シドニー)

読図 ヨーロッパ系やアジア系の人々も見られることに着目しよう。

用語解説

■ **白豪主義** はくごうしゅぎ 白人を中心とした国家の建設をめざすため、20世紀初頭に掲げられた政策。これによって、白人以外の人々の移住が厳しく制限された。また、以前からこの地に住んでいたアボリジニーも隔離され、迫害を受けた。

多様な文化に はぐくまれた社会

オーストラリアやニュージーランドの都市

では、イギリス風の建物をよく見かける。これは、両国がかつてイギリスの植民地だったためであり、イギリスの文化が社会の基礎を築いてきたことを示す。

オーストラリアでは、20世紀の初頭から白人を優遇する**白豪主義**が続けられてきた。しかし、第二次世界大戦後の国内における製造業の発展や、鉱産資源・羊毛・食肉・穀物など、一次産品の輸出增加に伴い、多くの労働力を必要とするようになった。こうした情勢の変化を受けて、白豪主義は1970年代前半までに撤廃され、その後はヨーロッパ以外の国々や、英語圏以外の国・地域から移り住む人々が急速に増加した。1970年代後半以降は、インドシナ半島からの難民を積極的に受け入れ、同時にアジアの人々の流入も急増した。このなかで、政府はオーストラリア社会の文化的な多様性を相互に認め合い、それぞれの文化を高めていくこうという**多文化主義**を積極的におし進めていった。多文化主義の重要な政策の一つ

(→ p.222)として、英語以外の多言語放送の実施があり、例えばラジオ放送は、70近い言語によって放送されている。また、小・中学校での初等科教育も含め、教育機関では外国語の授業を活発に行っているところも多い。先住民のアボリジニーの言語を学ぶ授業も行われている。

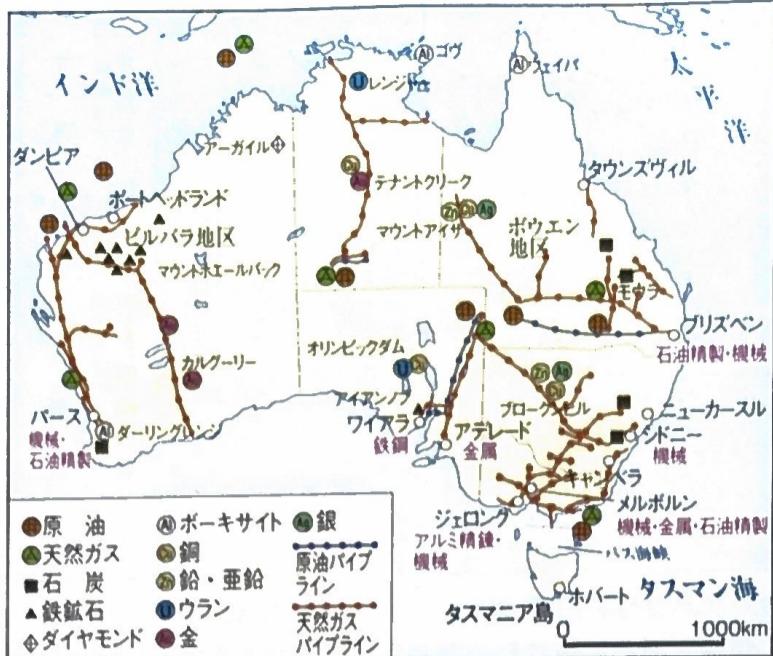
一方、ニュージーランドでは、先住民マオリの伝統的な文化や言語などを保存するための取り組みが行われている。イギリス発祥のスポーツとして知られるラグビーの国際試合前に、ニュージーランドの選手がマオリの民族舞踊であるハカを踊るのは、イギリスの文化と地域の伝統文化とが融合した一つの例といえる。



▲③ マオリのハカの踊り(上、ニュージーランド、2010年撮影)とハカを踊るラグビーニュージーランド代表の選手(下、日本、2013年撮影)

チェック

オーストラリアが移民を積極的に受け入れた理由と、多文化主義を推進している理由を説明しよう。



▲④ オーストラリアの鉱工業(Diercke Weltatlas 2008, ほか) 読図 資源の多様さと分布に着目しよう。



▲⑤ 大規模な鉱石の露天掘り(オーストラリア、マウント・ホエールバック)。

2 資源を通じて強まるアジア諸国との結びつき

豊富な鉱産・エネルギー資源

オセアニアで最大の面積をもつオーストラリアは、鉱産資源の世界的な生産国であり、その貿易を通じて中国や日本などアジア諸国との関係も深い。オーストラリアでは、19世紀半ばのゴールドラッシュ以来、多くの人々から人々が流入し、人口は急増した。現在、产出されているおもな鉱産資源は、鉄鉱石・ボーキサイト・ウラン・鉛・亜鉛・金・ダイヤモンドなどであり、種類は多様で、しかもその多くが世界有数の産出量を誇っている。ニッケル・チタン・マンガンといったレアメタルの生産も多い。これらは、LEDや燃料電池などの材料となり、(→ p.125)(→ p.151)先端技術産業には不可欠の金属で、世界的に需要が急増している。

产出された鉱産資源の大半はそのまま輸出されるが、ボーキサイトなど一部は鉱山に近い沿岸部の都市で精錬される。精錬業は、現地生産の自動車製造業、乳製品の食品加工業などとともに、工業の重要な一部門となっている。また、この国はエネルギー資源にも恵まれており、とくに石炭は長年にわたり、世界最大級の輸出量を維持している。大陸南東部のバス海峡や大陸西部の沿岸部では、原油や天然ガスが採掘されている。これら資源の開発にあたっては、これまで日本から多くの企業が進出し、投資も活発に行われてきた。近年では、中国で鉱産資源の需要が急増していることから、中国企業によるオーストラリアの鉱山会社との合併や買収も珍しくない。一方で、鉄鋼需要の変化など中国国内の景気動向が、オーストラリアの経済情勢により強い影響を及ぼすようになっている。

リード

オーストラリアは、図④のようにオセアニアの中でも鉱産・エネルギー資源に恵まれた国である。資源を通じたアジア諸国との結びつきをとらえよう。

リンク

鉱産資源の種類と利用(p.124)

鉄鉱石	
中国	82.0%
日本	8.8%

韓国 6.1 その他 3.1

石炭	
(2017年)	(台数) 7,456,777万ドル
日本	29.0%
中国	23.6%
韓国	16.0%
その他	12.1%
	15.0%

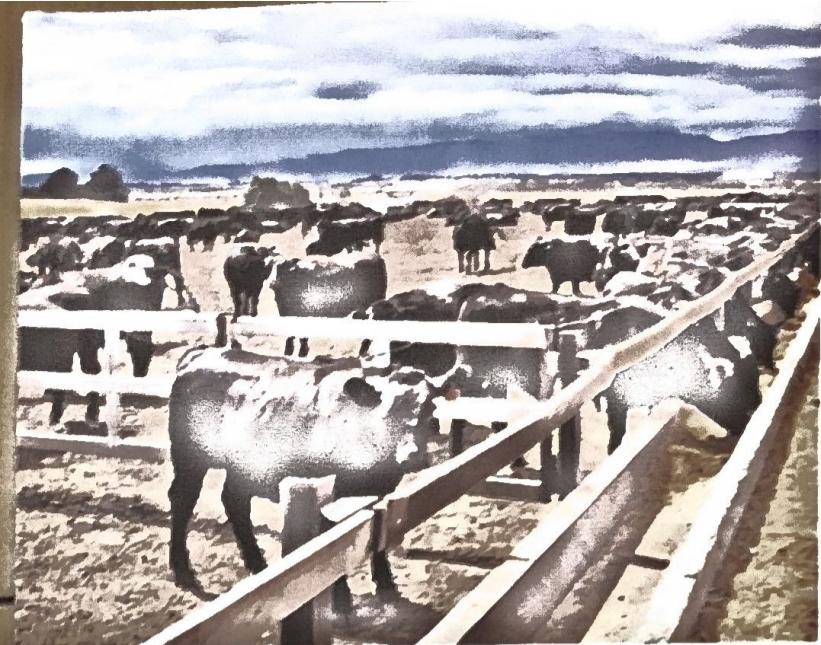
▲⑥ オーストラリアの鉱産資源の輸出先(オーストラリア政府資料、ほか)

鉄鉱石	
(2013年)	世界計 85万t
オーストラリア	59.5
その他	
鉄鉱石	
(2014年)	1137億7400万ドル
オーストラリア	52.9
その他	47.1
石炭	
(2015年)	12億9242万t
オーストラリア	30.4
その他	69.6
牛肉	
(2013年)	877万t
オーストラリア	13.3
その他	86.7

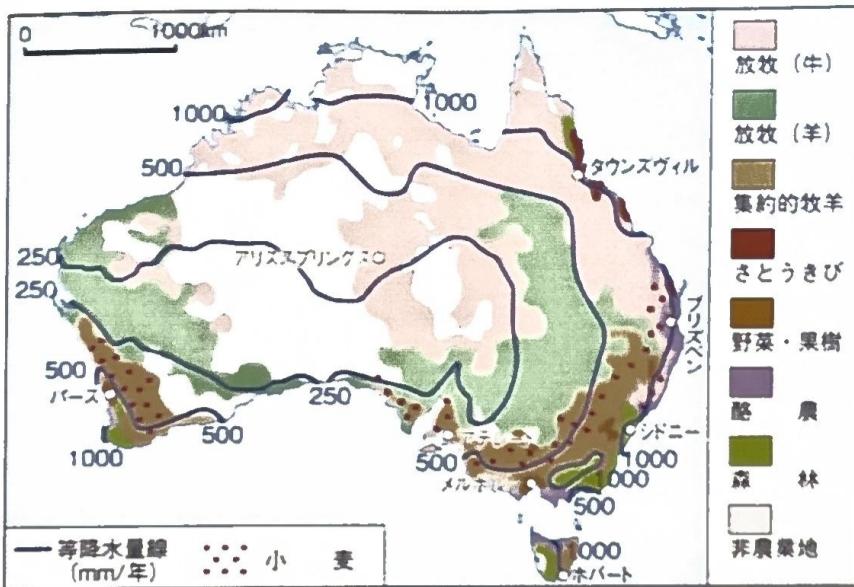
▲⑦ おもな一次産品の世界総輸出量に占めるオーストラリアの割合(FAOSTAT、ほか)

チェック

オーストラリアの資源開発にはどのような国がかかわっているだろうか。



▲① 日本企業が経営する肉牛のフィードロット
(オーストラリア、タスマニア島、2014年撮影)



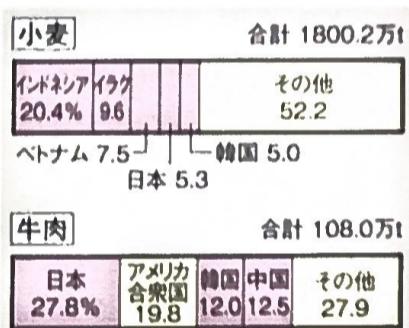
▲② オーストラリアの農牧業 (Jacaranda Atlas 2007、ほか)
読図 年降水量と放牧される家畜、栽培される作物との関係に着目しよう。

リード

写真①や図②のように、オーストラリアやニュージーランドからは、多くの農畜産物がアジアへ輸出されている。これらの国の農業の特徴をみてみよう。

リンク→

新大陸で発達した企業的農業 (p.100)



▲③ オーストラリアの小麦と牛の輸出先(2013年)
(FAOSTAT)

用語解説

掘り抜き井戸 被圧地下水をくみ上げるために掘られた井戸のこと。以前は自噴する井戸が多くあったが、現在ではポンプによってくみ上げられている。その水(鑽井水)は、地下深くから掘り出されるため一般に熱く、塩分濃度も高い。また、そのほかの溶解物質も多く含まれている。

3 アジア諸国に輸出される農畜産物

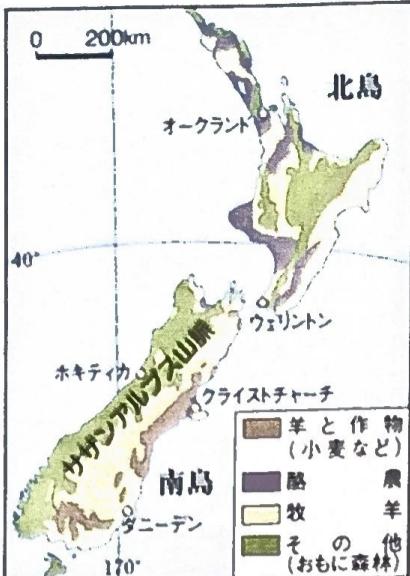
大規模な オーストラリアの農業

オーストラリアの農業の規模はきわめて大きく、内陸部には日本の都府県の面積に相当する牧場もみられる。そこでは、羊や牛の群れに出会うことはまれで、家畜の管理には小型飛行機やヘリコプターを利用して、内陸で放牧される羊の多くは羊毛を採取するためのもので、かつては日本に大量に輸出されていた。しかし今では、中国向けが多くなっている。また、オージービーフというブランドで知られる牛肉は、日本にもさかんに輸出されている。牧場のなかには、日本の商社やスーパー・マーケットと専属契約を結び、品種改良などにより日本人好みの肉質のやわらかい牛肉を生産しているところもある。

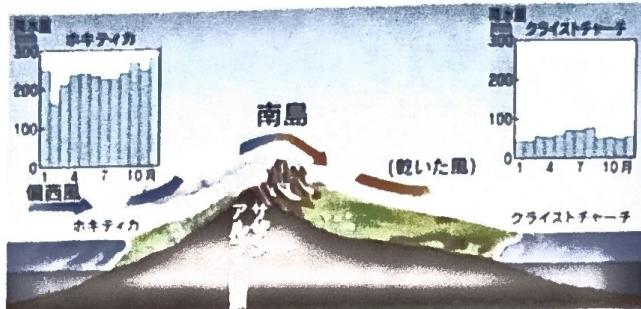
一方、おもに穀物が栽培されている大陸南部の農地も広大で、農家1戸あたりの農地面積が数千haに及ぶものも珍しくない。耕作や収穫には、大型のトラクターやコンバインが用いられている。小麦など、オーストラリアで生産される穀物の収穫時期は、北半球とは異なるため、はざわき端境期に世界の穀物市場の価格変動を抑える役割を(→ p.106 ④)もっており、アジアにもさかんに輸出されている。

降水量に左右 される農業

オーストラリアの降水量分布は、きわめて規則的である。内陸の砂漠を中心にして同心円状に分布し、大陸の外側になるほど降水量がしだいに多くなっている。しかし、大陸全体としては、その量は少ない。降水量が比較的多いのは、北部と東部、そして南西部である。砂漠とその周辺では農業はみられないが、そのほかの内陸部では、肉牛や羊の粗放的な放牧が行われている。とくに、グレートアーティアン(大鑽井)盆地では、



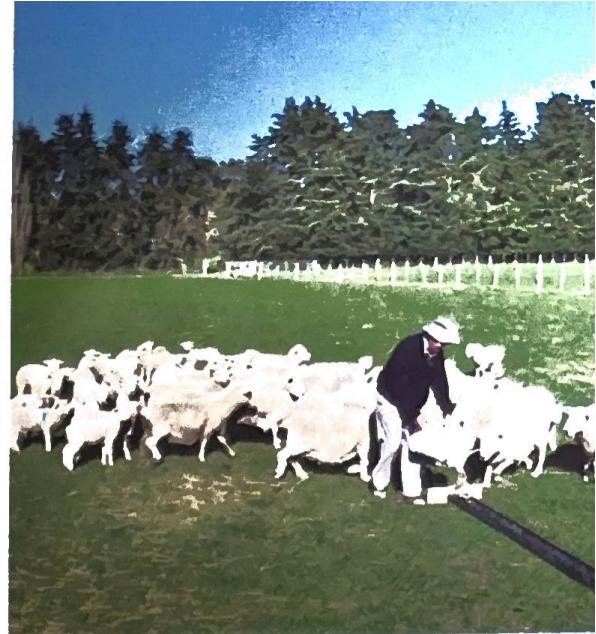
▲④ ニュージーランドの土地利用 (Jacaranda Atlas 2007, ほか)



▲⑤ 東西で大きく異なる降水量(気象庁資料, ほか)



▲⑥ ニュージーランドの輸出品(2016年)(UN Comtrade)



▲⑦ 羊の放牧でえさをやるようす(ニュージーランド, クライストチャーチ近郊, 2012年撮影)

開拓以来、豊富な被圧地下水^{ひあつ}を掘り抜き井戸¹(鑽井)でくみ上げることによって牧畜が発達してきた。しかし今では、地下水の量が減少したり、枯れたりしている井戸も多い。その周辺では、一部、土壤^{どじょう}の塩性化など環境問題も発生している。

(→ p.63, 89)

大陸南部の沿岸地域では、小麦や大麦などの穀物栽培と羊の飼育²
(→巻末2⑪) (→巻末2⑫)
と組み合わせた混合農業が営まれている。この農業地域は、大陸の東部から南部、南西部へと広がっており、世界的な穀倉地帯を形成している。また、マリーダーリング盆地の河川流域では、混合農業のほか、ぶどう^{かんきつるい}や柑橘類^{かんがい}などの果樹栽培、灌漑による稻作など³がみられる。さらに、大都市近郊では、酪農⁴や野菜栽培が活発に行われている。このような農産物や農產品の多くは、日本や東南アジアなど、おもにアジア諸国に向けて輸出されている。

ニュージーランドでも、畜産がさかんである。北島ではおもに羊・肉牛の放牧や酪農が行われており、チーズ・バターなどの乳製品や羊毛、羊肉・牛肉は、この国の中重要な輸出品となっている。南島は、南北に連なるサザンアルプス山脈を境に、その西側と東側とで大きく気候が異なる。山脈の西側では、偏西風⁵の影響を直接受けて年降水量もきわめて多く、うっそうとした森林が広がっている。しかし、傾斜が急なこともあって、農業にはほとんど利用されていない。それに対して、山脈の東側は乾燥⁶していて、なだらかな草原が広がり、おもに羊の放牧地や穀物栽培地として利用されている。また、かぼちゃの生産も多く、日本で秋から春にかけて出まわるものは、南半球のニュージーランドやトンガから輸入されている。

プラスα

太平洋の島々の産業

太平洋の島々では、いも類など伝統的で自給的な作物を栽培してきたところが多い。しかし、トンガでは、1980年代末以降、日本向けにかぼちゃの栽培が始まられ、その輸出量が急増した。2000年代前半のピーク時には、この国の重要な輸出品となつたが、日本市場でニュージーランド産・メキシコ産などと競合したことによって、今では韓国に多く輸出されている。また、農業機械や肥料・農薬などは、オーストラリアや中国から輸入される。

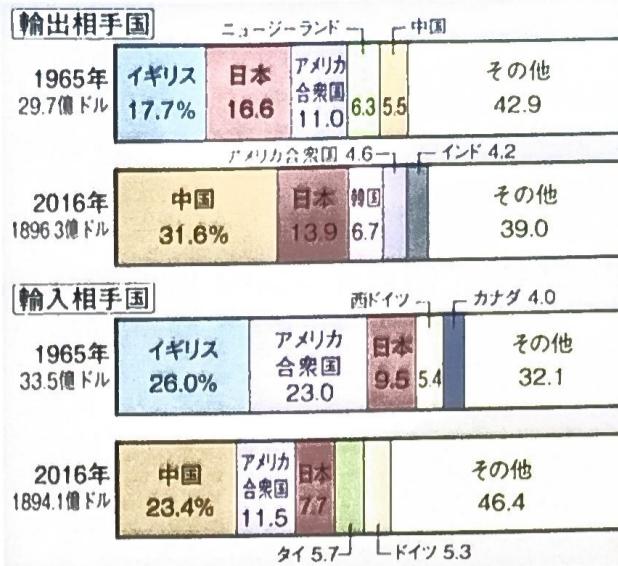
■ ニュージーランドは人口に対して羊の数が多いことで知られており、牛の飼育地を含めた牧場・牧草地の広さは、国土面積の約40%余りにも及ぶ。

チェック

- 1)オーストラリアやニュージーランドの農畜産物が、日本にとつて重要な理由を説明しよう。
- 2)オーストラリアでは、降水量が少ない地域で農牧業を行うことによってどのような問題が生じているか、説明しよう。



▲① APEC の首脳会議(中国、北京)、2014 年撮影



▲② オーストラリアの貿易相手国の変化(UN Comtrade)
読図 貿易相手国の変化を読み取ろう。

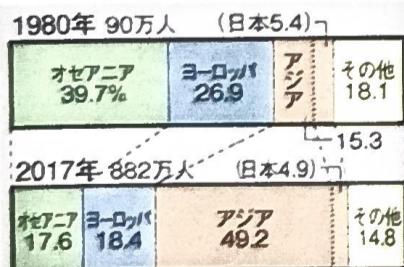
□リード

図②や図③のように、オーストラリアは貿易や観光の面で世界の国々との結びつきが強い。日本を含むアジアとはどのような結びつきがあるかみていく。

リンク

貿易の自由化と経済連携(p.165)

① 現在、太平洋沿岸の 20 以上の国・地域が参加しており、国土面積や人口規模、経済水準、文化的背景などの面で、ひじょうに多様である。日本は、アメリカ合衆国・オーストラリア・ニュージーランドなどとともに設立当初からのメンバーである。21 世紀以降の会議では、テロ対策やインフルエンザ対策、気候変動問題など、世界的な課題についても話し合いがもたれている。



▲③ オーストラリアを訪れる観光客の変化(Australian Bureau of Statistics, ほか)

□チェック

オーストラリアがアジアとの結びつきを深めるようになったきっかけと、その時期を説明しよう。

4 物や人の移動で強まるアジアとの結びつき

アジア・太平洋圏の一員として

かつてイギリスの植民地が多かったオセアニアには、イギリスと緊密な関係を築いてきた国が多い。その一国であるオーストラリアは、1960 年代までイギリスが最大の貿易相手国であり、入植以来、経済的・文化的に大きな影響を受けてきた。しかし 1973 年、イギリスの EC^④への加盟を契機として両国間の貿易量はしだいに減少し、オーストラリアの主要相手国は現在、中国・日本・アメリカ合衆国など、アジア・太平洋圏の国々へと変化してきている。

同様に、現在では、ニュージーランドやパプアニューギニアなどの島国もまた、日本を含むアジア・太平洋圏の国々との関係を強めている。こうした情勢のなかで、1989 年、オーストラリアの働きかけによってアジア太平洋経済協力会議(APEC)^⑤が結成された。

APEC のおもな役割と目標は、参加国間の貿易や投資の自由化・円滑化の促進をはかるほか、経済・技術協力、参加国間の安全保障を行うことなどである。関係の深まりとともに、オーストラリアやニュージーランドのスーパー・マーケット・専門店などでは、衣料品や家電・食料品などを中心に、アジア諸国からの輸入品が数多く見られるようになった。一方、東南アジアの国々においても、スーパー・マーケットや商店に、オーストラリアやニュージーランドで生産された乳製品、肉類や果物など、新鮮さが要求される生鮮食料品などが並ぶようになった。また、APEC に加盟している東南アジアや、中国・日本など東アジアの国々とオーストラリアやニュージーランドの国々との間には、貿易品をめぐる経済的な結びつきのほか、人々の技術的・文化的な交流もみられる。